
見えてますか？聴こえてますか？

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えてますか？聴こえてますか？

【著者名】

月猫

【あらすじ】

わたしが見てきたもの、聞いてきたもの。すべてノンヒュイクションです。

これは、わたしの幽霊日記。あなたにはこの声、聴こえていますか？この姿、見えていますか？

初めまして。月猫つきねこです。今から書くことは本当の事です。
信じてもらえないかもしだれませんが・・・。

わたしは小さい頃から、人には見えないものが見え、聴こえない
ものが聴こえます。何だかわかりますか？それは・・・。

靈れいです。

初めて見たのは、幼稚園の年長の頃。黄色い光が見えたのです。そ
れからは少しずつ、姿や声がはっきりしてきました。小さい頃は恐
怖以外のなんでもありませんでした。困ったものです。
どうしたらいいか、なんてわかりません。家族にも、親戚にも、そ
んな人はいなかつたのですから。

そして、今も変わらず見えています。聴こえています。

これは、そんなわたしが今までに体験してきたことです。まったく
ホラーではないです。わたしの幽靈日記を見ていると思つて読んで
いただければいいと思つてます。

修学旅行先で

中学校定番の修学旅行先は京都、奈良。わたしもそうで、宿泊先は京都でした。

宿泊先は大変綺麗で、とてもいいところでした。1日目は、楽しくて楽しくて、もう大はしゃぎで・・・。わたしも何もかも忘れて楽しんでおりました。

2日目。京都の自主研修がありました。班行動です。いろんな寺院を回り、クタクタになって帰つてきました。そんな時事件が起きたのです。部屋に入つた時。なんとも言えぬ気配というか、雰囲気というか、を感じました。なんだろう?と思いつつ友達と、「疲れたね」とか「なんか綺麗だつたね」と話していました。その時。

「キヤー——————」

という鋭い悲鳴が聞こえました。隣の部屋からです。わたしと友達はビックリして顔を見合わせ、部屋を飛び出しました。部屋の外には、同じクラスの子たちがたくさんいました。同じ階には、クラスの女子しかいません。部屋も3~4人部屋でした。みんなが集まっているその中に2人の女子が茫然と立っていました。

「どうしたの?」

私が聞きました。するとその子たちは、震えながら言いました。

「窓のところから口笛が・・・」

「やだ。こわっ」

わたしと同じ部屋の子が言いました。わたしは不思議に思い、口笛が聞こえたというその部屋を覗きました。そしてギョッとしました。そこにいたのは・・・。

女人。白い服を着た、髪がぼさぼさの・・・。

「怖い。うちら、何も見てないし、聞いてないから怖いよね」わたしと同じ部屋の子が言いました。周りの子たちも怖がっていました。本物が見えてるけどね、と思いましたが(笑)

「と・・・、とりあえずカー・テン閉めて。窓の方に行かないよつにしな」

と、わたしは言つておきました。クラスの子にも誰にも、わたしが見えることは言つていません。しかし、言つていたとしても見えたものは言わなかつたと思います。とても不気味だつたからです。このことで、修学旅行を怖い思いをさせるのは嫌だつたからです。

わたしが小学5年の時の話です。

その日、夕食中ふと前をみると・・・。なんと、兵隊さんが！けがしてるようで、頭などから血を流していました。もづ、怖くてガクガクです。（笑）もしかしたら戦争とかで亡くなつた方かな、と思いつつ、その日は寝ました。

その夜。夢を見ました。

ぼんやりとした白いような、灰色のよつた空間の中を見ていのよつでした。すると、あの兵隊の人が。

「ごめんね。怖がらせるつもりは無かつたのだけど・・・」

兵隊さんが言いました。そして見えてきたものは・・・。海でした。ふと気が付くと、わたしは軍艦の中にいました。

大砲の音。叫び声・・・。

その時。

ドカー――――

大きい音と、すごい衝撃を感じました。そして、ボンヤリと・・・。

「おじさん、これで死んじゃつた」

兵隊さんが言いました。

「喉がひどく乾いたよ。生前は、きゅうりが好きだから、きゅうりを食べたい」

兵隊さんは穢やかに言います。

「それからね、会いたい人がいる。その人が大切で、心配なんだ」そう言い終えると同時に、私は目を覚ました。兵隊さんが普通の優しいおじさんだつたこと。大切な人がいると言つていたことに胸が痛みました。でも、会いたい人がいる、という願いは叶えてやれそうになくて・・・。

急いでこの事を親に言い、その晩はきゅうりをお供えしました。新

シートゲがチクチクのやつ。

どうして自分にしか見えないのかとともに苦しく思つていきました。そんな気持ちは、現在だつてかわつてません。幽霊は苦手です。でも。どうか兵隊のおじさんが少しでも救われます様に。素直にそう感じることができた出来事でした。

めめ「いつのむじねん（後書き）

初めまして。白猫しらねこです。はじめに、のとじねんあこせつしましたが、改めてさせていただきました。見えることで、聞こえることで、苦しんできたこと。だからこそ、知った事、楽しいと感じた事。たくさんありました。ここでは、そんなことを少しずつ書いていきたいです。見える人、そうでない人にも何かを伝えられたら、と思っています

トントンゲーム

私が中学1年生の時の話です。中一の冬で転校していくのでその前の話ですね。そのころは、学年の子のほとんどがわたしが靈感が強いことを知っていました。その頃に部活の子たちの間に流行ったのが、「トントンゲーム」です。これは、輪になつて最初の子が隣の子の肩を叩きます。一周回つて、最初の子が叩いた回数と同じ回数だったら靈がない、というゲームです。そんなゲーム、ホントにできたりしないだろう、という簡単な気持ちでゲームをやっていました。ところが、わたしのところから、いつも回数が変わるのです。最初は、勘違いかとも思つていましたが、やはり違うのです。それに、段々具合が悪くなつていきました。そして、周りの子もわたしの事を気味悪く思つようになりました。次第にこの遊びはしなくなつていきました。

このような遊びは、本当に寄せ付けます。みなさんも注意してくださいね。

追われる

引き続き、中学1年、転校する前の話です。

ある日から、何やら見られている気配を感じました。授業中、休み時間、帰る時、お風呂に入る時、寝る時・・・落ち着かない生活が1週間程続きました。段々と気味が悪くなってきて、気配がしたらすぐにその方向を見るようにしました。そんな日々が3週間ほど続き・・・ついに正体が分かりました。分かったのは、部活からの帰り道。後ろから気配を感じて、振り向きました。すると、電柱の陰から女がこちらを見ていたのです。髪が長く、全身真っ黒の服。黒い傘を持つていました。何だか、他の靈とは違う何かを感じました。一層怖くなりました。

そして数日後。帰り道でその女人人と日が合ってしまいました。しまった、と思いました。これはやばい、と。そしてそれからは、その女人人に追われるようになりました。会う度に。もう、普通の生活はしていられません。気の抜けない日々が続きました。けれど、どうして追つてくるのか、という疑問が湧いてきました。そこで勇気を出して、聞いてみる事にしました。

学校帰り。いつものように追つてきます。わたしは途中まで逃げて、立ち止り聞きました。

「どうしておつてくるのですか？」

と。

「・・・」

答えてくれません。しかし、聞こえていいはずです。聞いた一瞬だけ、こちらを見ました。とても悲しい顔で。でも、どこか憂いのあら顔でした。辛い、という感情がほんの少し流れできました。

その後、靈などに詳しい人の話で、それは死神であるという事が分かりました。

そしてその1ヶ月後。家から見えるマンションの屋上にいたのを見

たのが最後に、すっかり追つてこなくなつたのです。

そして更に1ヶ月後。部活の演奏会（わたし、吹奏楽部です）で、ステージで演奏していると・・・。目線の先の客席にポツカリと黒い空間がありました。よく見るとあの女の靈・・・、死神でした。そして、それを境に見かけなくなりました。

本当にあれが死神だったのか、どうして追われていたのかは未だに分かりません。でも原因があるとすれば・・・。その頃は転校、家庭の問題がいろいろあつたのです。辛くて、少しでも死にたいと思つてしまつたからかもしれません。でも、ステージで演奏する私を見て、命を奪うことを諦めてくれたのかもしれません。

それでも。あの悲しい顔、憂いのある顔は忘れられません。流れてきた、感情も・・・。もしかしたら、死神にも誰かの命を奪うのは、抵抗があるのかもしれません。

死神様、ありがとうございました。

それからは、死神に対する見方が変わりました。

追われる（後書き）

お疲れさまでした。相変わらず、稚拙な文ですみません。

死神は不思議ですね。命を奪う神。けれどそれは、この世に必要なことなかもしれません。生と死の上で。簡単に死にたいとか言つな、ということを教えられました。どんなに辛くとも、生きていかなければならぬのです。

小さな方々

今住んでいる家に住んでいる方々の話です。
幽霊じゃあ、ないですよ。

実は・・・。小さい人たちが住んでいるのです！・・・と、言つても分かりませんね（笑）

では・・・紹介します。

体長・・・15～20センチメートル程

特徴・・・集団行動している。おしゃべり。ビビりな一面も。人と目が合うとビックリする。着物を着ている。

その他・・・女、男など性別がある。子供、お年寄り、若い、中年くらいなど。年がある。家族、独身などそれぞれ。

などです。背の高さなど以外は、生活は人間のようですね。嘘っぽいし、「なんだか頭おかしいんじゃないの？」と思う方もいると思いますが、本当です。信じる、信じないは勝手ですけど。この方々は靈ではなく、こうこう生き物なのです。小人、こうべきでしようか。この方たちとのエピソードを書きます。

ある日、居間でくつろいでいると・・・。

「おー、こっちだ、こっち。急げ」

「待て。そう急かすな」

「とにかく。急がなければ」

わたしは、勇気を出して話しかけました。（ちなみに、この方々はどちらも男でした）

「ねえ、どうしたの？」

すると、驚いたように、

「わあ。目が合った」

「ひイイイイイイ」

と悲鳴を上げて逃げて行きました。逆に、私がビックリしてしまいました（笑）

信じる。・信じない

世の中、目には見えないものがたくさんいる・・・。
こう言われて、信じた人は、どのくらいいますか？たいていの人が、
嘘っぽいと思うでしょう。

わたしは、信じるも、信じないもどちらも正しい、と思つのです。
見えていなければ分からないうことがほとんどです。

「嘘つき」

こう言われる理由も納得できます。

自分が見えるからといって、他の靈感の強い人が見えるとは限りま
せん。それだけ、不安定な世界なのです。私が見ているものは・・・。

時々、靈感をうらやましがる人もいます。しかし、そんなにいい事
ばかりではありません。なんとなく、解ってくれる人なら良いけれ
ど、場合によつては、ただの嘘つきですから。

けれど、一つだけいい事があります。それは、生きている人も、死
んでいる人も、見える範囲ならだれとでも会話ができる事です。樂
しいことじやありませんか。出会いは奇跡、とよく言いますが、ほ
んとうにそれが実感できるのです。それらは、裏切つたり、感謝を
したり・・・。

めまぐるしい日々だけど、今日もそれを噛みしめ、生きています。

書じてない。（後書き）

2日ほど、更新が滞りました。“めんなさい。
相変わらず、稚拙な文だけど今書いたように、靈からも人からも学
んだことが沢山あります。そんな出来事も折々出していきたいです。
そして皆さんにも少しでも多く、伝わればと思っています。
読んでくださいって、ありがとうございました。これからもよろしく
お願いします。

白猫・みやれ（前書き）

更新、遅れました。すみません。
これからも、がんばっていきますので、よろしくお願いします。

白猫・みぞれ

我が家には、人間の靈だけでなく、動物の靈もいます。それは・・・。猫です。猫の靈がいるのです。

全身真っ白で、すばらしく綺麗なその猫の名は・・・。みぞれといいます。名前が分からなかつたので、わたしが勝手に付けさせていただきました。

最初は、怖がつて寄つてきてくれませんでしたが、近頃は名前を呼ぶとこちらを見てくれるようになつたのです。すゞい進歩ーー！ ただし・・・。みぞれはかなり、気まぐれなのです。あと、散歩好きです。毎日家にいるわけではありません。

可愛くて仕方ないのですが・・・。相手は死んでいるんですよね・・・。生きていれば、ずっと一緒にいられるのに・・・。これはわたしが一生抱えていかなければならぬ、ジレンマなのかと思つています。

ともあれ、みぞれが成仏するまで、一緒にいたいと思ひます。・・・ もう少し、懷いてくれればいいなあ。

白猫・みやれ（後書き）

感想くだせつたら、嬉しいです。

それぞれの生きた、記憶（前書き）

かばで寝込んだおじまじて、更新遅れました。『あなたなき』。

それぞれの生きた、記憶

死んでしまったから、幽靈になる。それは当然のことです。だけど、やり残したことがあるからこの世をさまよっている。だけど、もともとは人や動物でした。生きてきた記憶があります。わたしはときどき、そんな記憶を見る事があります。たいてい、夢でですが。今回は、そんな記憶について、いくつか書きます。最近、家に強い靈が住みつきました。普通の人にも影響を与えるほどです。その靈の記憶を、昨夜夢で見ました。

夜。暗くて静かな道路を、一人の女の人気が歩いていました。最初は分かりませんでしたが、家に住み着いた靈だと分かりました。女人が横断歩道を渡ろうとすると、すぐくスピードを出した車が走ってきました。そして、女人の人を轢いてしまったのです。女人人はかなり飛ばされました。それで死んでしまったのです。

もう一つ書きます。

昔、まだ江戸時代頃のこと。とても賑やかなところに住んでいる感じでした。そこで、商人をやっていた人です。とてもかつきずいでいる感じです。そこに、子供と奥さんの一人で幸せに暮らした、といふ記憶でした。

前に書いた、きゅうりのおじさんも記憶を見たことになりますね。誰にでもあった、幸せだったり、辛かったりする記憶。そして、突然訪れた死。記憶は、生きていた証しでもあるのだと思います。たとえ、誰にも見えなくとも、わたしはたくさんの靈と出会いました。そして、これからもきっと。でも、だれも知らなくても、覚えていなくても大事な出会いでした。これは、私の記憶でもあります。そんな一つ一つを忘れないように、これからも生きていきたいです。

それぞれの生きた、記憶（後書き）

いかがでしたでしょうか。感想、意見などなど、お待ちしております。

カミングアウト（前書き）

しばらく、シリアスな話が続いたので、今回はわたしのバカな話を書いてみました。「月猫のそんな話、興味無いよ」と思う方は、スルーして下さって結構です。

カミングアウト

私が中学校に入学したばかりの頃の話です。

この日は、友達のTちゃんが再テストで居残りだったので、小学校は違っていた、MちゃんとTちゃんを待っていました。Mちゃんは、私と席が前後なので結構仲良しでした。いつものように、ギャーギャー話していました。そしてその事件は、Mちゃんの一言から始まつた・・・。

「ねえ、月猫つて、靈とかそういうの、見える人？」

ドキッとしました。Mちゃんには見えることを言つていなかつたのです。なんで知つているのかな、と心臓がドキドキしました。しかし、中学校には同じ小学校だった子が、沢山いるのです。入学して1か月程。もう、噂が広まつてしまつたのか。しかし、バレては仕方がない。

「バレてしまつてか」

「えつ！？ そうなの！？」

あれ？ 反応がおかしい。噂で知つていたなら、「やつぱりそうだつたのか」という反応じやないか？

「へへ。すごい」

Mちゃん、超感心（？）している。

「でも、噂つてすぐに広がつてしまつんだね」

私が言いました。Mちゃんは、キョトンとした顔で私を見ました。

「噂？ 何それ」

「えつ！？」

驚愕の一言。

「噂じやないの？」

「うん」

じゃあ、何だろ？。まさか、拳動不審な行動を、知らぬ間にとつて

いたとか・・・？

「なんで、知つていたの？」

「知つていた？・・・違うよ。ただ訊いてみただけ」

まさか、なんとなくで、カミングアウトしてしまったのか・・・！

！―そして、Mちゃんは更に驚きの一言を言いました。

「・・・。実はね、マンガの影響」

そこで思い出しました。Mちゃんはかなり、マンガ好きなのです。しかも、今ハマっているのは妖怪とか、幽霊とかそっち系の（笑）マンガの影響でカミングアウトしてしまった私ついでに・・・（笑）

カミングアワー（後書き）

いかがでしたか？「こんなことで・・・つてことあるありますね。

感想、意見等ありましたら、よろしくお願ひします。

また、「こんな体験した？」なんてことで、書いてほしい事があれば、書いてやって下さいませ。

大きな出会い

小学生の頃、衝撃的な出会いをしました。なんと、同じ、見える人には出会ったのです。「大したことじゃない」と思う人もいるかもしれませんが、当時の私にとっては、衝撃的な事でした。後にも先にも、見える人には出会っていません。その人は、夏織ちゃん（仮名）といいます。残念ながら、中学校が離れてしまった事、私が引っ越ししてしまったことで今は仲良くありません。でも、夏織ちゃんとはいろいろなことを体験したので、エピソードはいろいろあります。なので、今後も夏織ちゃんは出てきます。

小学3年の頃。掃除の時間だけでは終わらず、放課後に私と夏織ちゃんはゴミ捨てに、行くことになりました。ゴミ捨て場は北校舎。噂だけなら良かつたのですが、本当にウジヤウジヤいる、嫌な場所でした。

夏「なんかさ、時間が時間だけに、怖いね」

私「そうだね。何だか息苦しい」

途中からは、話題を変えて面白い話をしていました。ところが・・・。

3階の渡り廊下に差し掛かりました。そこまではキャーキャー騒いでいた私と夏織ちゃんですが、突然黙りこみました。

カツカツカツカツ

聞こえているのは、私たちの足音だけ・・・のはず・・・。

私「ねえ、聞こえてる?」

夏「うん。さつきから。着いてきているね」

カツカツカツ

私たちの足音。でも、他に・・・。

カツカツカツ

そうです。私たちの足音とは別に、もう一つ、聞こえてくるのです。

私たちは、立ち止りました。もう一つの足音は、2、3つ遅れで止

まりました。

夏「いくよーー！」

私「うん」

夏私「せーーーの！」

振り向きました。誰もいません。しかし、気配はするのです。

夏「走るう

私たちは、全力で走りました。

カツカツカツカツカツカツ

私たちの走る足音。

カツカツカツカツカツ

もう一つの足音。

少し走ったところで、私たちは止まりました。すると・・・。

カツカツカツカツカツカツカツ・・・・・・

もう一つの足音がすごい足音を立てて近付いてきたのです。

私たちが、猛ダッシュで教室まで逃げたことは、言つまでもありません。

大きな出会い（後書き）

いかがでしたでしょうか。今回は、結構な怪談物でしたね。いつも見て頂いている方、しおりを挟んで頂いている方、本当にありがとうございます。月猫は、幸せ者です。つう（感涙）

1週間程前。不思議なものを見ました。

（ここからは、独り言です）

「う。寒い。冬は、嫌だねえ。」

「そういえば、今日はそんなに靈を見かけないかも」「寒くなると、靈もどこかに引っ込んでしまうのかな・

訳ないか

。 空はは
。 肌が骨で
。 茶色の大きな羽の生えた大きな鳥の力群が
。 。 。 。

「死んだ鳥の大群？靈か？・・・何か違うような・・・まあ、いか」

その時は不思議に思いながらも、気にしないでいました。田の錯覚かもしないし・・・。結局、正体は分からずじまいです。けれど、このことだけは分かります。あれは、靈じゃありません。靈とは、異質な気配だつたからです。

あれは、いつたい何だつたのでしょうか。そのことも、いつか伝えられたらと、思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252z/>

見えてますか？聴こえてますか？

2011年12月21日14時56分発行